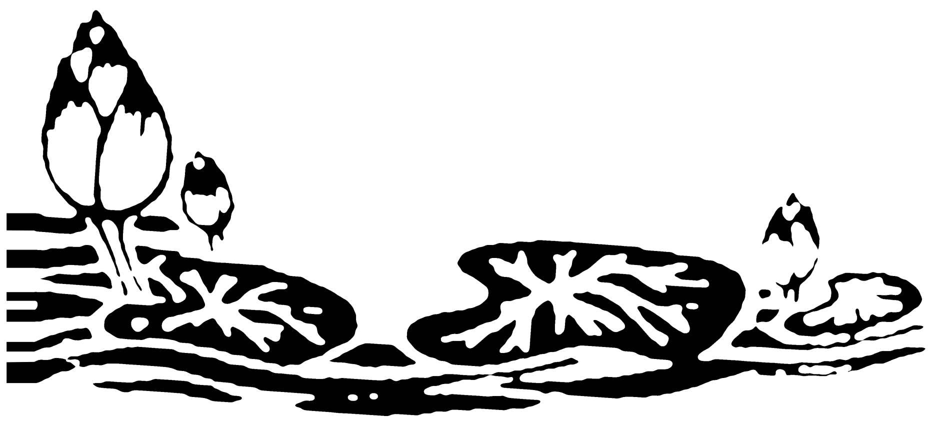
花と兵隊

あなたには いま 伝えておきたい——



昭和二十年八月十五日。
あの夏、生きて敗戦を迎えても、
祖国に還らなかった日本兵がいた。

もくじ

作品解説　2
登場人物紹介　4
歴史解説〜ビルマ戦線〜　6
映画評　8
松林監督インタビュー　11
スタッフ紹介　12

もうひとつの「戦後」の記録——なぜ彼らは日本に還らなかったのか？

六十余年後に届いた、「未帰還兵」の遺言——。

かつて、地獄の戦場がアジアにあった。太平洋戦争中、約19万の日本の将兵が、その尊い命を失ったビルマ——。

『花と兵隊』は、タイ・ビルマ国境付近で敗戦を迎えた後、祖国に還らなかった6名の日本兵、すなわち「未帰還兵」を描いたドキュメンタリー映画である。敗戦から60余年を隔て、戦争の記憶が薄れつつあるいま、90歳を前後する彼らを撮影当時20代だった松林要樹がとらえた。

かつて、名匠・市川崑監督の『ビルマの竪琴』（１９５６年）は、地獄のビルマ戦線を情感豊かに描き、ヴェネチア国際映画祭で受賞、85年にリメイクされるなど、多くの共感をもって支持された。また、70年代初頭に今村昌平監督がテレビドキュメンタリーとして手掛けた「未帰還兵」シリーズは、目覚ましい経済発展を続ける日本に抱く未帰還兵たちの思いに迫った。しかし、なぜ『ビルマの竪琴』の主人公・水島上等兵は僧侶となり戦地に留まったのか？　そして、高齢を迎えた未帰還兵たちは、いま何を思うのか？　松林要樹は、２００５年から3年に渡る当事者たちへの長期取材で、その謎に挑んだ。もうひとつの戦後史ともいうべき彼らの暮らしを見つめ、ときには彼らと生活をともにしながら、新たな証言を記録した。それは、ある未帰還兵の現代日本への遺言となった。製作中、2名が鬼籍に入ったからだ。

土地に根を張り、花を咲かせた彼ら。そして、戦争とは？　家族とは？　生きるとは？

敗戦後、自らの意思で所属部隊を離れ、現地に残った日本兵たち。彼らは、軍隊で培った技術を活かし、土地に根付いた。あるものは医療技術を、またあるものは農業用のポンプ施設を土地に残すなど、戦後の復興に貢献した。そして彼らは、新しい家族を築いた。とりわけ妻たちの存在が異郷の地に生きる彼らを支えた。家々には、新婚当時の彼女たちの可憐な写真が飾られている。夫婦がそろって当時を物語るときの表情や何気ない目配せが、その営みの確かさを物語る。いまでも彼らは、子や孫たちと、餅をつき、蕎麦を食べ、祖国を懐かしんでいる。

しかし、そんな望郷の想いを引き裂くように、やがて質素な部屋の一角で、壮絶な戦争の記憶が語られはじめる——なぜ彼らは日本に還らなかったのか？

南国の激しい雨の間隙、晴れやかな日差しの中で、穏やかに老後を迎える元兵士たちの平和な日常に、漆黒の時代の闇が潜んでいる。

１９４１年12月、日本軍はビルマ進攻作戦に着手した。目的は、連合国から中国国民党政府へと送られる物資の輸送路の遮断であった。緒戦こそ日本軍の圧勝だったが、42年6月のミッドウェー海戦を境に制海・空権を失い、戦況は急転する。新たな補給路を確保するため、「泰緬鉄道」の建設は劣悪な環境で行われ、おびただしい犠牲者を出した。補給もままならぬまま、飢餓線上の逃避行を余儀なくされた「インパール作戦」など、ビルマ戦線には、約33万の日本の将兵が送られ、そのうち約19万人が亡くなった。

登場人物紹介

坂井 勇

カレン名：パトゥ
〈享年90歳〉
（右：妻／マ・ミャイ）

１９１７年（大正６）４月10日、ブラジル・サンタエルスチナ生まれ。日系ブラジル２世。40年（昭和15）までは、日系１世の父の営むコーヒー農場で働く。タイ・ビルマ国境のメーソット在住。戦後、エンジンの技術を生かし、タイ北西部メーソットに精米所を持っていた。晩年は家族と共に暮らし、２００７年（平成19）５月９日、みなに見守られながら亡くなる。

【日本軍での経歴】
独立自動車第60大隊 輜重部隊 上等兵。父が事業に失敗し、１９４０年（昭和15）の東京オリンピック見物を口実に、サンパウロから家族と共に来日。ブラジルの農場で車の運転をしていたため、自動車部隊に配属される。福井にて招集されマレー・シンガポール作戦を経てビルマへ。インパール作戦では地獄を見た。ビルマ東部のタトン（現 カレン州）で終戦を迎える。

【戦後の歩み】
終戦後、タトンの捕虜収容所にて日本軍を離隊。ジャングルでの生活を経て、少数民族であるカレン族の部落に逃げ込む。生まれ故郷のブラジルに戻らず、日本に親類もいなかった。自動車の修理など特技を生かしてカレン族の援助をする。その際、パオ族のマ・ミャイと出会い結婚。58年（昭和33）ビルマ国内にてカレン族の独立運動が激化にともないタイへと避難。タイでは、エンジン技術を生かし、精米所を作り、メーソットに３万坪の土地を持った。その後、自宅の裏庭の土地をカレン族とパオ族に月々２００バーツ（６０００円程度）で提供し、子供や孫に囲まれ暮らしていた。 72年（昭和47）に日本へ一時帰国、85年（昭和60）にはブラジルへ一時帰国。２００７年５月にメーソットの自宅にて死去。

中野弥一郎

カレン名：アチョ
〈88歳〉
（写真右：妻／マ・オンジ）

１９２０年（大正９）７月28日新潟県小千谷市生まれ。日本では、農業を営む家族を手伝っていた。現在はタイ・ビルマ国境メーソット在住。農業を営み、宝石商と雑貨屋を営む。３人の子供家族と孫と共に暮らしている。

【日本軍での経歴】
烈師団歩兵58連隊 衛生兵 伍長。衛生兵として１９４０年（昭和15）中国へ。43年（昭和18）シンガポール。44年（昭和19）インパール作戦に送られる。インドのコヒマの手前サンジャックにおいて、英国軍の砲弾を浴び負傷。九死に一生を得る。所属した烈師団の佐藤師団長は、司令官牟田口の指令に逆らい、インドのコヒマから独自に撤退を開始した。そのおかげで生き延びることができたという。ビルマ東部のラッカ（現 カレン州）で終戦を迎える。

【戦後の歩み】
終戦後、１９４５年（昭和20）10月１日の夜に日本軍より離隊。捕虜収容所ゼマトエにて日本軍から出た後、衛生兵の技術を生かし、カレン族部落で暮らす。逃亡生活中にパオ族のマ・オンジと結婚。当時サルウィン川にてボートで物資を運んでいた坂井勇と知り合う（坂井の妻、マ・ミャイとマ・オンジは姉妹関係）。カレン族の独立運動の激化により、坂井の家族と共にタイへ避難。タイでは、医療活動と共に宝石商などを営む。現在は近所の畑の様子を見に行くことが仕事。中野と坂井は、今も近所に住んでおり、互いに日本語を使わずに、ビルマ語で会話をしている。90年（平成２）に、新潟・小千谷の実家に両親の墓参りのため一時帰省した。最近は、バンコクに住む孫が送る日本語新聞を一週間遅れで読むことを楽しみにしている。

藤田松吉

タイ人名：ターカム・シェクジェム
〈享年90歳〉
（写真内の写真：妻／ポーチャル）

１９１８年（大正７）12月２日、長崎県長崎市生まれ。馬車曳きをする不良少年だった。２００１年に、妻・ボーチャルを亡くした。養子がいるが、刑務所から出所したばかりでウマが合わない。チェンマイの南、約70kmランプーン県パサーン郡に暮らす。09年（平成21）１月25日、自宅近くの病院で亡くなる。

【日本軍での経歴】
菊師団 歩兵55連隊 歩兵 伍長。１９３９年（昭和14）長崎県大村市にて志願して入隊。早く軍に入隊し早く兵役を終えたいと思っていたが、結局、広東攻略作戦、シンガポール作戦、ビルマ戦線と６年間転戦。ビルマ戦線（フーコン作戦）で左足を負傷。怪我が原因で後退が遅れたため、所属部隊とはぐれ、タイ北西部のメーホンソン近郊で終戦を迎える。

【戦後の歩み】
戦後、日本に帰りたいと、チェンマイを駆けずり回るが、終戦後12年経つと、日本軍が再びビルマに戻るという噂を聞き入れる。それを信じ、タイ北西の山奥の村に隠れた。その後、タイの国家事業の道路工事などを手伝い、現場視察に来た大臣に会いタイ国籍を取得した。道路工事に関わっているときに、親

伊波廣泰

〈88歳〉
（写真右：妻／チラファー）

１９２０年（大正９）５月17日、沖縄県国頭郡生まれ。戦後、バンコク郊外で約50年間鉄工所を経営。２００１年（平成13）より、妻の生まれ故郷のチェンマイ県チャイプラカーンで隠居生活を送っている。手先が器用なので現在も自宅で様々な工作をしている。

【日本軍での経歴】
淀師団 野砲四連隊 工兵 兵長。沖縄に生まれるが、８歳で大阪に移住。床屋を営んでいた父の職人仲間の華僑に北京語を教えてもらう。移住した大阪では、言葉が違い、沖縄県出身者は差別されているように感じ、大阪には馴染めなかったという。23歳で招集され、戦時中はシンガポールで、兵器の修理などを行った。シンガポールからタイに向かう貨物列車に乗り、マレーのイポーにて終戦を知る。

方の勧めで妻・ボーチャルと結婚した。道路工事の給料で土地を買い、果樹園を営んだ。子供ができなかったので、養子（スウェン）をもらう。１９７３年（昭和48）、長崎に一時帰郷。その後、現地で一人こつこつと８００体の遺骨を収集する。82年（昭和57）念願の慰霊塔を自費で作る。２００９年（平成21）１月、自宅近くの病院で死去。

花岡 稔

タイ人名：ブンチュー・チュンヨーティン
〈85歳〉
（写真右：妻／ソンバット）

１９２３年（大正12）５月29日、京都府京都市生まれ。実家は建材屋を営み、車の運転ができた。現在、バンコクで自動車修理工場を営んでいる。妻と長男とともに暮らす。３名息子がおり、皆エンジニアである。

【日本軍での経歴】
独立歩兵１６２大隊 上等兵。１９４４年（昭和19）シンガポールへ。同年、祭師団の補充部隊として、ビルマ戦線に送られる。インパール作戦の補助要員であったが、車の運転ができたため、ビルマのインレー湖近郊タ

【戦後の歩み】
戦後、バンコクのドムアンにて日本軍から離隊。北京語ができたため中国人名：張広泰を名乗り、バンコク郊外で車のエンジンや機械の修理屋を始める。１９５３年（昭和28）、日本に３週間の一時帰国。日本の農業灌漑施設をみて、タイにポンプ農業用水路から水産施設までをカバーした伊波鉄工所を立ち上げた。技術を生かし、80歳まで仕事をしていた。現在は、妻・チラファーの実家の近所で隠居生活をしている。

ウンジーで物資の輸送に従事。インパール作戦が失敗するや、その敗走路で地獄を見た。マラリアにかかり、生き残るので精一杯だった。ビルマのモールメンにて終戦を迎える。

【戦後の歩み】
戦後、連合軍によりバンコク郊外に武装解除された日本兵が集められる。泰緬鉄道のレールの鉄材をタイ政府が購入し、労働者として元日本兵が使われるという噂話を聞き、日本軍から離隊。その後、タイ西部の村を転々とし、自動車などの機械の修理などをした。１９５３年（昭和23）バンポン近く残っていた日本兵の誘いを受け、日本の繊維業者の社員になるため日本大使館に出頭した。同年、トヨタがタイに進出してくると、特技の車の修理技術を生かし、現地採用第１号となる。同社の勤務中、出張で日本を三度ほど訪れる。生まれ故郷の京都の町並みは変化しており、「望郷の念は余りありません」と語った。79年（昭和54）の退職の際には社長から表彰される。現在も現役で車の修理をしている。

古山十郎

〈92歳〉
（写真右：妻／キヨコ）

１９１７年（大正６）３月15日、愛知県葉栗郡生まれ。実家は小さな織物工場を営んでいた。現在、中華系タイ人の妻と共にバンコク

市内に在住。商社時代の貯金で暮らす。子供は、長男と長女が二人いたが、90年（平成２）泰緬鉄道で有名なカンチャナブリの水難事故で長女を亡くし、今は長男家族が週に一度訪ねてくる。

【日本軍での経歴】
近衛第四師団 歩兵 上等兵。１９３９年（昭和14）、日中戦争の時、近衛第四師団の歩兵として補充召集される。太平洋戦争開戦後、師団から転属となり、バンコク西部のバンポンの糧秣補給廠に移る。泰緬鉄道始発駅のバンポンにて貨物物資の輸送を取り扱う。その時、使役の豪州兵捕虜と接する。バンポンで終戦を迎える。

【戦後の歩み】
戦後、数ヶ月経ち、戦時中に捕虜と接していたため虐待による戦犯になることを避けるために日本軍から離隊。もしそのまま残っていたら、シンガポールのチャンギー刑務所に送られていたという。その後、バンコクのチャオプラヤ川対岸のトンブリーにて台湾人の経営する砂糖工場にて働く。そこにいる間、日本人であることを隠さなかった。戦後８年ほど経ち、日本の綿布業社の駐在員として働く。その後、同郷人の繋がりから、日本の商社の現地駐在員として働く。長年タイにいたため華僑とのつながりが深く、大手商社より営業の成績がよかった。現在は近所を散歩するのが日課となっている。

歴史解説

ビルマ戦線

松林要樹

１９４１年12月８日、真珠湾攻撃に先立つこと約一時間前、山下奉文中将率いる帝国陸軍第25軍によるマレー作戦が展開され、第15軍はタイへ進駐し、ビルマ進攻作戦に着手した。

米英を中心とした連合国は、日中戦争時から、蒋介石率いる重慶・国民党政府へ物資を送り続けていた。ビルマ進攻作戦の目的は、その輸送路、通称「援蒋ルート」の遮断であった。

１９４２年２月、第25軍は、英国の東洋における植民地支配の砦であったシンガポールを占領。日本軍は、東南アジアへの足場を確保した。

日本軍の特務機関の支持を得たアウン・サン率いるビルマ人同志が、ビルマ独立義勇軍を創立。ビルマ独立義勇軍との共闘により、同年３月、英領ビルマ・ラングーンを陥落させた。これにより、ラングーン港と中国・雲南省昆明を陸路で結んでいた「援蒋ルート」の一つを遮断。同年５月には、英領ビルマのアキャブを制圧。同月、米領フィリピン・コレヒドール島を攻略した。緒戦は日本軍の圧勝であった。

しかし、流れは急転する。同年６月のミッドウェー海戦で、日本軍は主力空母４隻とその全艦載機を失った。その結果、それまで日本が優勢であった空母戦力は米国側が圧倒していった。以降「ガダルカナル島撤退」「アッツ島玉砕」など敗戦が続き、太平洋における日本軍の優位性は完全に失われた。

制海権、制空権を失い、シンガポールから前線へと物資を海上輸送することが困難となった日本軍は、同年７月、タイとビルマを結ぶ新しい輸送路を計画された「泰緬鉄道」の建設に着手する。この鉄道建設は、デヴィッド・リーン監督の映画『戦場にかける橋』（57年）でも知られる。従事した現地徴募のロームシャ（労務者）は、約七万人とも、三十万人とも言われ、さらに日本軍約一万人、連合国軍捕虜約六万人を使用することにより、翌１９４３年10月に完成した。劣悪な労働環境のなか、食糧不足による栄養失調やコレラ、マラリアなどにより多くの犠牲者を出し「Death Railway（死の鉄道）」と呼ばれた。

一方、「援蒋ルート」の一つを失った連合国軍は、インド北東部からヒマラヤ山脈を越える空路輸送と新たな輸送道路建設に切り替え、重慶・国民党政府に物資を輸送していた。１９４３年８月、ビルマの第15軍司令官・牟田口廉也中将により、そのルートの主要都市であるインド北東部のインパールへの進攻を意図した「インパール作戦」準備命令が下達された。はじめは補給の目算の立たない作戦に反対した大本営も、政治的な理由などから、これを許可。１９４４年３月「インパール作戦」が発動された。

作戦に参加した第15軍３ヶ師団は、順調にインパール付近まで進出したものの、圧倒的航空兵力を持つ英軍の前に作戦は頓挫し、たちまち食糧、弾薬の不足におちいった。戦線は崩壊し、同年７月、ついに作戦中止が命ぜられた。退却もまた、悲劇であった。雨期の豪雨のなか、ビルマの山中は険しく、完全に補給を断たれ食糧も得ることが出来ない。おびただしい餓死者を出し、その退路は力尽きた日本兵の死体が延々と続き「白骨街道」と呼ばれた。「インパール作戦」を含む、ビルマ戦線では、約三十三万の日本の将兵が送られ、そのうち約十九万人が亡くなった。

映像文化とはなにか

「花と兵隊」という映画　佐藤忠男・映画評論家

「花と兵隊」というすぐれたドキュメンタリー映画が出来た。タイに行って、太平洋戦争当時ビルマなどで戦いながら、敗戦後に日本に帰らず現地にとどまって、いま八十歳台になっているいわゆる未帰還兵たちに取材したものである。撮影と監督をひとりでやった松林要樹は日本映画学校の卒業生であるが、この作品は日本映画学校の創設者である今村昌平のかつての作品と深くかかわりを持っている。

今村昌平は一九七〇年代頃、しばらく劇映画を離れてドキュメンタリーに没頭していた。劇場公開用に作ったものもあるが主としてテレビ用であり、それらはテレビ作品がたいていそうであるように、公開時には評価されても以後は殆ど忘れられている。

なかでも重要な作品に一九七一年に東京12チャンネルで放送された「未帰還兵を追って」がある。第一部「マレー篇」と、第二部「タイ篇」とがあるのだが、この「タイ篇」のほうに三人の未帰還兵がそのなかのひとりの家に集まって今村昌平自身の司会で座談会をやる長い場面がある。その家の主人で村の医者におさまっている大阪出身の利田さんという人は大いに喋る。

学校は小学校高等科だけでブリキ屋の徒弟だったのだそうであるが、自分はプロレタリアだと言うあたり、戦前の左翼思想に多少は触れていたのだろう。旧日本軍がどんなにひどいことをやったかを体験的に語り、天皇批判も言い、敗戦時にはそんな日本に帰っても仕方がないと考えてタイに残ったのだと言って、論理は整然と一貫している。

この利田さんの熱っぽいまでの雄弁を黙って苦々しい表情で聞いていたのが長崎出身の藤田松吉という志願兵出身の元伍長である。

今村昌平はこの無口な人物にとくに関心を持ったようで、なんとか話しかけて重い口を開かせる。

するとこの藤田さんは「われわれ日本人は天皇陛下の赤子（セキシ）なんだ」と言い、だから自分は戦争では上官の命令で大虐殺もやったし、タイの田舎に残ったのも、やがて日本軍がまたもどってくるという上官の指令を信じて待っていたのだと言う。

利田さんがかつての日本軍の残虐行為の批判などをすると、藤田さんは、そんなことは戦争だから当たり前ではないかと言わんばかりの表情でこう言う。

藤田「イヤ、モウ、ワシはですな、あのーあんた達もう、どういうな気持ちをそのされるかわからんが……」

利田「あ、あんたもやってないでしょ」

藤田「イヤ、私も現在、三万位あのコンクリートの中入って油入れてですね。油なげしてまる燃やしましたよ」

利田「生きた人間を？」

藤田「生きた人間、三万位」

利田「もう当時、あんたそりゃ、あの将校の命令で」

藤田「そうです。私がもう前で、菊師団の前で、わたしゃもうスパイで入ったんで、ご自分のやつを、その全部コンクリ、中入らして、ほったら大丈夫とあのシンガポール入る前です。ほえであのコンクリートのアナをホガしてですね、上からガソリン、下までやったんです、で爆発さしたんです」

ここで藤田さんの言っていることは言葉どおりに信じることはできない。単に誇張しているというだけでなく、妄想めいてもいるし、話の脈絡もとらえにくい。あるいは日本語を忘れて上手く言えないせいかもしれないし、そもそも彼は、まとまった話を筋道だてて話す必要のある境遇にはなかったのだと思う。

そんなこの人にとって、戦争は地獄だったが、同時に自分の全人格の意味を問われる機会であり、それを利田さんが言うように殆ど全く無意味な愚かしいものだったとは思いたくなかったのであろう。その意味を突然問われて彼はいささか逆上している。もともと意味をまとめることがいちばん苦手だったこの人が、まとめようとしてまとまらない言葉と悪戦苦闘している。そこに感銘を受ける。

かつて書いた「今村昌平の世界」という本で、私はこう書いている。

「この藤田さんという元日本兵は、戦争中にふきこまれた忠君愛国思想を、ほとんどそのまま、純粋に保持しつづけている人物である」

今村昌平はこの人物に関心を持って、一九七三年に彼を日本に招き、兄のいる長崎の郷里と東京に案内して、肉親や知人に会わせてその言動を記録した「無法松故郷に帰る」というドキュメンタリーにまとめている。

藤田さんは意気けんこうとしていて、長崎にいる長兄が川崎で苦労している妹をあまり助けてやっていないと聞いて兄貴のところへ行って喧嘩しようとさえもする。もと自分が当番兵をしていた中隊長に電話で連絡がとれると、涙声になってこう言う。

「……藤田は、あっちの戸籍を貰っとりますですよ。そいで、タイサンサクセン、第三回目の作戦にかかるかも分らんです。そいでもう一度、あのね、英国人や、支那人の首を取ってみたいんです」

さいごに今村昌平が彼を皇居前に案内すると、彼はうかない顔をして、本当はこんなところに来たくはなかったんだが、お宅たちのために来たのだと言い、こう語る。

「たとえ、自分の親としてみなさいよ。我々は、親もう捨てて、天皇を親と思っていたわけ。そうでしょう。それを今さらなって、その、自分の子供を捨てとるちゅうのは、何のためですか、外国におる奴は、さあ、やっぱり出して早く出してやって、日本にこうゆうに発達しとる、早く見せたが、それが人間じゃないの天皇陛下じゃないの」

タイの奥地にとどまって再び日本軍がやってくるのを待っていたという彼も、東京の繁栄を見てさすがに心が動いて、自分たちのような敗戦後に外国にとどまった兵士は天皇から見棄てられた民なのだと自覚してがく然とした様子である。しかしそこで今村昌平が、ではなぜ、先日長崎の兄が「天皇陛下のことなど忘れてしまえ」と言われたときに猛烈に怒ったのか、と問うと、こう答える。

「あれはワシが言うのが当たり前よ。日本の国において、自分の親をばかだってそんなばかげた話があるの」

藤田松吉はこう言って妻子のいるタイに帰って行った。

言っていることは時代錯誤もいいところであるが、彼は彼なりに戦争の時代をけんめいに生きたのである。このドキュメンタリーではついおかしくて笑ってしまうが、本当は誰も彼を笑うことなど出来ないのだということは百も承知のうえのことである。戦争中の軍国主義の純粋結晶が全く場違いの今、とつぜん目の前に現れたような驚きによる苦笑である。苦笑しながらこの人物を他人とは思えなくなってしまう。昔のままでいればこうなっていたかもしれないもうひとりの自分だと感じて忘れられなくなってしまうのである。

あの人物はその後、タイの妻子のもとにもどってどうしているか、私はたいへん気にしていた。

日本映画学校は今村昌平が設立した学校であるから、「未帰還兵を追って」や「無法松故郷へ帰る」は教師たちの記憶に残っており、教材として学生たちが見ることもある。だから卒業生のドキュメンタリー映画作家のなかから今村昌平のそれらの作品に出ていた人たちのその後を追跡する作品が現れるのは自然な流れであり、まさにそのような作品として「花と兵隊」が出来上がったのである。そしてこれが、今村作品とはおもむきの違う、しかし勝るとも劣らないすぐれた作品になった。というより、これはこれで独立した作品であるが、今村作品と続けて上映するならば、あたかも戦争に兵士として投入された世代の生涯を追う大河ドラマとして見るような経験になると言えるだろう。

「花と兵隊」で取材されている未帰還兵は六名である。そのうち今村昌平のシリーズ作品と重複しているのは藤田松吉元伍長、中野弥一郎元伍長、坂井勇上等兵の3人で、あとはこの作品ではじめて見る人たちである。九十歳になった藤田松吉は七年前に妻をなくしているが、あとの五人は奥さんが健在で、しかもみんな、じつに仲むつまじい風情である。

勝手な想像だが、戦場だった外国に侵入してきた軍隊の生き残りとしてひとりでとどまって生きてきた未帰還兵としては、地縁も血縁もなく言葉もよく通じない状態で生きのびるには、その土地の人間である妻は大いに頼りになる存在で、大事にしないわけにはゆかなかったのではないか。

藤田さんを含めてみんな、新婚当時の、あるいは若い頃の妻の写真を抱えて映画に撮られるが、いずれもなかなかの美人である。そんな美人と結ばれることができたのも、彼らが地元の男たちにはない技術と知識を持っていてそれぞれけっこう頼もしかったからかもしれない。

「花と兵隊」の花とはこの妻たちのことだという。とくにこの映画の取材中に亡くなってお葬式の場面もある坂井勇元上等兵は、生前よく、日本の桜は美しいと言っていた。ひ孫に「さくら」と長男が名づけた。戦中戦後、彼らは苦労し悲惨な経験もしたけれども、案外な幸福も得られた。「花」はその仕合わせな面を象徴している。

その坂井さんの場合、インパール作戦の無残な敗走に参加して地獄のような経験をしたのだが、ビルマの少数民族のカレン族に助けられて生きのびた。そして戦後も自動車の運転や修理ができることで彼らの役にも立つ。カレン族の独立運動とビルマ政府軍によるその弾圧がはじまると彼はカレン族難民としてタイに移り、技術を生かして成功して土地を買った。そしていま、その土地はカレン族とパオ族の難民たちに無償で提供して住まわせており、自分は子や孫たちに囲まれて裕福に暮している。

アジアの解放を理想としてかかげて実質は侵略戦争だったいわゆる大東亜戦争を戦った元日本兵としては、あるいはその理想にいちばん近い人生を過せたということになるのかもしれない。

伊波廣泰元工兵兵長も未帰還兵たちの中の成功者と言えるだろう。機械修理の技術を生かして車や機械の修理工場をはじめ、タイにはそれまでなかった灌漑施設のためのポンプ屋をはじめてどんどん手広く事業を発展させたのである。

「生涯あるのは、ポンプ作りだけです。だけれども、何と言いますか、面白い生涯でした。仕事がよくできて、思うようにできてです」——と言う。

こんなふうに、戦争では地獄を体験したし、戦後も苦労したが、いまではそれなりに日々の生活に満足できて、奥さんたちもそれを保証するような温かい笑顔を見せている人たちの中で、藤田松吉はやはり異色がある。

スタッフが藤田松吉を田舎に訪ねてゆくとき、土地の人に住所をたずねると、「ああ、あの塔のある家か……」という言葉が返ってくる。案内してもらうと、確かに小さいが記念塔のようなものが立っているところに彼の家はある。

その塔は藤田松吉が四十年間続けた遺骨収集で集めた約八百体の遺骨をおさめたものだという。まるで竹山道雄の童話「ビルマの竪琴」の水島上等兵である。ただし、「ビルマの竪琴」に描かれた水島上等兵の所属する中隊は、隊長が西洋音楽好きのインテリ将校で、いつも隊員みんなに小学唱歌のような歌を歌わせているという不思議な軍隊だったが、藤田松吉の所属していた部隊はとんでもないものだった。

「未帰還兵を追って」では彼は、戦争中に自分がやったという捕虜大虐殺について話していた。ただ、その人数があまりに多いので、ビルマではそれほどの事件はなかったはずだと思って作り話か妄想のように聞いていたのだが、こんどここの映画で語っているところによると、それはシンガポールで彼の部隊がやったことらしい。シンガポールでは華僑の抵抗が激しく、日本軍による中国系人たちの大虐殺があった。

藤田松吉はこう言う。

「あそこでは、殺したということは、小さい、このくらいの子供を殺してしまったんだよ。支那人の子供。殺してしまったんだよ。……あれは支那人の子供よ。支那人の子供とか、かかあとか、なんとか、全部殺してしまったんじゃ。命令が出てきたから殺したんだよ。女も子供も。あれは支那人の子供だけじゃよ。支那人。……良かっても、悪かっても、支那人だったら全部殺してしまえと、こう命令が出るんじゃよ。分るか。これはいいから殺しておけ、これは悪いから殺しておけとは違うんだ。支那人の子供を全部殺してしまえとなるんだよ」

藤田松吉の言葉はしばしば脈絡を欠くし、そのため非常に分りにくい。矛盾することも少なくない。しかし強烈な真情があふれていて耳をそらすことはできない。言葉が分りにくいのは長年日本語を使わない生活をしていて日本語が下手になっているというせいもあると思うが、他の未帰還兵の人たちが口数は少なくともいちおうきちんとした日本語を話すのに比較すると、やはりもともと話す能力が乏しい人だったのだと思う。

柳田国男がなにかで、昔の日本の田舎の人たちの多くは、生涯、何語とまとまった言葉を言うことさえなかった、と書いていたと記憶する。村の生活ではそれ以上話す必要もなかった、と言われると、村の指導層以外は多分そうだったのかもしれないと思う。藤田松吉自身は馬車を扱っていたようで、あまり喋る必要もなかったのかもしれない。

だから彼は、どうしても話さなければならないときにはもう、胆からしぼり出すような

声で、必死の思いをこめるようにして喋る。

彼が中国人の子供たちの大虐殺について話したときが正にそうで、言いたくないことを言う必死の思いが口調にも異様な響きをもたらしている。この思いこそが彼の戦争体験の集約なのではないか。

彼は監督からインパールの敗走の飢餓状態のときに人肉を食べたかと問われ――「自分が苦しい度に食ったんだよ。……分るか？苦しい、苦しいや、自分の心が苦しい」――と自分の胸を抑えるようにして本当にあえぐような表情をして言う。

なんともボキャブラリーの乏しい、言葉に論理の筋を通す能力の乏しい話し手であるが、彼がいまなおそのことで真剣に苦しんでいることは疑いない。

映画の表現が、既成の芸術の諸ジャンルに較べて突出している点のもっとも重要なことのひとつは、まさにこの、藤田松吉氏のような、自分の言葉では、自分の立場では、自分の力では、その胸の内にあるものを公衆に表現できるとは思えない下積みの庶民の自己実現を実現させ得るということである。

文学も美術も音楽も演劇も舞踊も、古くから芸術として広く認められている表現形式は、いずれも特別な才能があると認められている人々によって創造されるものであると考えられているし、人並みかそれ以下という評価しか得られない者は表現者として活動することは難しい。実際には凡庸な芸術家は少なくないけれども、それでも彼が芸術家であると認められている限りでは一般の素人とは格段に違う技術は持っていて当り前だとされている。

その意味で芸術家は特別な存在であり、しばしば特権階級でさえもある。すなわち、芸術家による表現は、その芸術家が傑出した存在であればあるほど、その表現の内容は、下積みで無知で凡庸な人々の心の奥にあるものの表現にはなり難いという問題をはらんでいる。

しかし現実の社会は、下積みで無知で凡庸な多数の心の動きによってこそ支えられ、動かされているのである。いや、そういう人々は実際には、社会の上層にいる頭も良くて有能な少数の人々に操られているにすぎないと考える人もいるかもしれない。そうでないとは言わない。そうかもしれない。

しかしそういう特権的な少数者も、凡庸な多数の心の波長に合う信号を発信し得たときだけその多数を動かすことができるのである。特権的な少数者が自由自在に凡庸な多数を操れるわけでは決してない。むしろ凡庸な多数こそが彼らと波長の合う特権的な少数者を選んで指導者に祭りあげているのかもしれない。

両者の関係は有機的に結びついていて、切り離して考えることはできない。

今村昌平の「未帰還兵を追って・タイ篇」に登場した藤田松吉は、彼自身そう言っていたように〈陛下の赤子〉そのものであって、こういう兵士が〈皇軍〉の中に少なからずいたからこそ、アジアの各地で展開された日本軍の残虐行為も可能だったと言わざるを得ない。

しかし考えてみると、このような人々の本当の姿はかつて芸術作品では表現されたことがないことに気付く。戦前戦中には日本軍の残虐行為をはじめとする否定面は検閲によって表現を厳しく禁じられていたし、戦後、それが真実追及の願いの下で鋭く激しく暴露されるようになってきても、そこで残虐なる皇軍兵士を演じ演出していたのはおおむね平和主義者である。

ときには軍国主義を弁明し擁護しさえする表現者もいるが、がいして言えばかつての軍国主義の言い分と心情をそのまま表現できる者が戦後に芸術の表現者という特権的立場を得ることは難しい。

だからこそ私は、「未帰還兵を追って・タイ篇」で、軍国主義時代の〈皇軍〉の兵士の否定面を純粋に保存しているように思われる藤田松吉の出現に戦慄したのである。

「無法松故郷に帰る」でも彼はまだ虐殺の記憶にひたっているような言葉を吐くが、同時に日本の現実を見て自分のような〈赤子〉に救いの手をさしのべてくれなかった天皇への疑問にもとらえられはじめている。

あれから三十余年。「花と兵隊」では九十歳になった藤田松吉元伍長は昭和天皇の写真を見ながらこう言う。

「……みんな（ビルマとかの）住民に、すまなかったと、言うのが当たり前じゃ。……これは大きな顔をしている。俺は天皇陛下だからと。大きな顔をしているようなものだ」

相当な変化である。そのうえでシンガポールで華僑の子供たちを殺したことを今こそ真剣に苦しんでいるのである。

「あれは命令だ。中隊、連隊の命令。支那人の子供、一人も残すなと。偉い人の命令だから。自分の中では、悪いとは思っているんだ」

そして言う。

「この慰霊塔を作ったのは、自分が悪いことをしたと、理を言って作ったんだ」

「ビルマの竪琴」の水島上等兵は日本兵の遺骨の蒐収のためにビルマに残った。藤田松吉は日本兵の蒐収を本当にやって慰霊塔まで作ったが、じつはその祈りの心のもとにあるのは、戦友たちのためというよりはむしろ、「自分が悪いことをした」という虐殺の罪の悔恨であるように感じられる。この人はそうした心の動きを言葉で整理し説明することは苦手である。しかし本当に悩み苦しんでいるのだ。

こういう心の整理や表現の苦手な人は自分からそれを公にはしない。言葉では表現できないだけでなく絵でも音楽でも表現はできないであろう。

しかし表情や言葉のつかい方、手ぶり、身ぶりは、それが本当か嘘かを雄弁に語っており、それらを正しく把握することのできるドキュメンタリーだけがそれを表現として公の場に出すことができるのである。

芸術家という特権階級でない、普通の人の苦悩がこうしてようやく公に表現されるのである。軍国主義の真の無残さと、そこからの脱却の本当の足どりが確認されるのである。それは感動的である。

今村昌平が「未帰還兵を追って」シリーズを作ったときには、彼らがなぜ日本に帰らず現地にとどまったか、ということが関心の中心だったようである。そこから彼らならではの視点による日本の社会や国家に対する批判を導き出そうと期待している様子が、彼自身によるインタビューからうかがわれるし、じっさいその意味で興味深い問題点がいくつも出てくる。

実際には敗戦の混乱やさまざまな事情で、帰りたくても帰れなかった場合が多かったということが「花と兵隊」では示される。

そのかわり松林要樹監督は、未帰還兵たちとその土地の女性たちとのロマンスに重要をおき、そのことをつうじて彼らがその土地にとけ込んでゆけたことに着目して、やさしいハッピーエンドをいくつも見出してもいる。

三十余年の年月をへてモチーフも微妙に変化しているが、これは今村昌平の提出した主題の発展として理解して、両作を一連の連作として見るといっそう興味深い。こうして主題が深まるのがドキュメンタリーならではの面白さなのである。

松林要樹監督・インタビュー

――企画の経緯を教えてください。

企画書を書いたのは2005年です。その頃僕は、フリーでアフガニスタンやインドネシアなどを取材している映像ジャーナリストのアシスタントをしていたのですが、そろそろ自分で企画を立てて番組を作らないと生活していけない。でも、実績もないので取材費を出してくれる企業もない。そんな迷っている時に、日本映画学校時代の講師だった安岡卓治プロデューサーに「インドネシアの残留日本兵を取りあげてみては？」とアドバイスを頂いたんです。実は僕、日本映画学校に入学してすぐに今村昌平監督のテレビドキュメンタリー「未帰還兵」シリーズや「からゆきさん」を観て衝撃を受けたんです。調査した結果、「未帰還兵」シリーズに出演していた坂井勇さん、中野弥一郎さん、藤田松吉さんの３名はご存命でした。幸い、企業ＰＲビデオ製作の仕事でまとまったお金が出来たので、すぐにタイに飛びました

――出演交渉はスムーズに出来ました？

藤田松吉さん以外は比較的スムーズに（苦笑）

――藤田さんは、故郷・長崎に一時帰国する一部始終を追った「無法松故郷に帰る」で強烈な印象を残した方ですが、その後も今村監督と連絡を取っていたのでしょうか？

僕が藤田さんからお聴きした話では、一度日本に帰ったときの写真が送られて来たそうです。今村監督が亡くなった事を伝えると、「お前がどこの誰であろうとかまわないから、俺のかわりに線香をあげて来い」と言われました。

――今、新たに未帰還兵を追うにあたり、何を主題にしようと考えたのでしょうか？

母ちゃんとの話、彼らの奥さんとの話です。彼らが現地に残ったきっかけは敗戦だと思うんです。でも、残り続けた理由のひとつは家族ではないか？と。72年にグアムから帰国した横井庄一さんも、74年にフィリピンから帰国した小野田寛郎さんも家族を持たなかったから、帰る場所は日本しかなかったはずです。未帰還兵を題材にした映画や書籍は数あれど、そこに言及している人がいなかったので、やってみようと思ったんです。僕が若かったからでしょうが、坂井さんや藤田さんは、家に泊めてくれて孫のように接してくださいました。一緒に暮らしながら彼らの生活を取材し、話を聞くことができました。未帰還兵という題材をスキャンダラスに扱うのではなく、彼らがこれまでどういう思いで暮らしてきたのか？いまなにを考えているのか？それを記録したいと思ったんです。

――タイトルの意味は？

“兵隊”はもちろん元日本兵たちです。そして“花”は、彼らにとって華々しい存在である妻たちの事を指していますが、それだけではありません。映画の中には、蓮の花をはじめ様々な花が出てきます。それぞれに意味がありますから、そこは楽しんで観てもらいたいです。

――しかし、彼らの結婚に至る経緯を聞くと、中野弥一郎夫人のマ・オンジさんのように周囲に勧められて結婚したなど、決して恋愛で結ばれた関係ではありませんね。

インタビューでは、そう答えていますが、マ・オンジさんの表情を見ていると、ホントにそうなの？と、つい思ってしまいます（笑）。たしかに、彼らが技術を持っていたことが大きかったのだと思います。衛生兵だった中野さんなんて、村医者よりも確実に技術も知識もあったでしょう。その土地に、必要な人材だったのだと思います。

――藤田さんにインタビューするシーンでは、「今の日本は戦争に負けた国だとは思ってらっしゃらない？」という質問をぶつけて、「負けたとか勝ったとか写真（映画に）撮ってもダメだ。これで止めるよ」と叱責されています。そのシーンをあえて残してますね。

そうなんです。あそこはカメラを2台回して自分の姿も撮りました。藤田さんは僕の挑発にノってくれるんです。さすがに無法松は健在でしたね。藤田さんには最初は取材を断られたんです。何度も通って、日本茶を持っていったり、慰霊塔を掃除したりして、ようやく話をしてもらえるようになりました。

――監督は30歳と戦争を知らない世代です。なぜ、戦争に興味を持ったのでしょうか？

1999年から、東南アジア、インド、アフガニスタンを１年近く廻った経験が大きかったですね。バックパッカーというと少しは聞こえがいいけれど、いわゆるアジアへの貧乏旅行（苦笑）。アジアの国々を旅すると、僕が日本人だというだけで敵意をもたれたり、反対に尊敬されたりすることがありました。それは何故か？ かつて日本人はそれらの国々で何をしてきたのか？ そんな疑問を持ちました。 若いから甘すぎると言われるかもしれませんが、実際に自分の目で現場を確かめたかった。そして、そこで暮らす人たちのことをもっと知りたいと思ったんです。

カンボジアに滞在したのは、ポルポトが死去したちょうど１年後でした。市街からパン！パン！という音が聞こえてくるんです。はじめは、華僑が何かを祝う爆竹の音だと思いました。でも、それは銃声だったんです。ただ、そんな街でも子供たちの目が輝いていた。人って、経済的に豊かであることが、必ずしも豊かじゃないんだと実感しました。そして、01年にビルマ戦線ってどんな場所だったのだろうと思い、ミャンマーに行った時の事です。北方のシポーという町で映画館に入ったら、上映の前に日章旗と共に愛国行進曲が流れていたこともありました。東南アジアを旅すると、日本軍が残したものがいまでも至るところに残っています。

聞き手：中山治美（映画ジャーナリスト）

監督·撮影·編集	松林要樹
編集	辻井　潔
音楽	津嘉田 泰三
タイトルデザイン·宣伝美術	成瀬　慧
プロデューサー	安岡卓治
写真提供·取材協力	井上朝義、毎日新聞社、近現代フォトライブラリー
翻訳	タイ語／秋庭孝之、北タイ語／関口輝比古、ビルマ語／ウィン·ダン
英字幕	松下希和、久保陽子
取材協力	井上朝義、山本哲朗、宮原仁三、高須茂男、中村常五郎、谷口巳三郎 住田勲、日高富士夫、日高百合絵、田村仁、Phormpatsorn Sakai、Cherdchay Chomtawat 蓮尾佳典、浜口文幸、Mai Kyaw Oo、スミタ·カルチャーセンター&プロダクション、在日ビルマ連邦少数民族協議会
製作協力	千野壮太郎、中村直樹、貞苅俊行、永瀬隆、木田敏男、花崎耕作、田中紀生、柴田直治 中島大成、平工智浩、湯沢康介、住田千鶴子、牧梶郎、藤田康雄、鈴木大介、柳原敏夫
機材協力	白井雅之、小田総一郎
編集協力	浜口文幸、塩崎登史子、大澤一生、佐野亨、今井友樹、直井佑樹
製作	記録映画「未帰還兵」製作委員会
配給	安岡フィルムズ
配給協力	東風、KAWASAKIアーツ

2009/106min/DVCAM/日本語·ビルマ語·タイ語他

©2009 Yojyu Matsubayashi

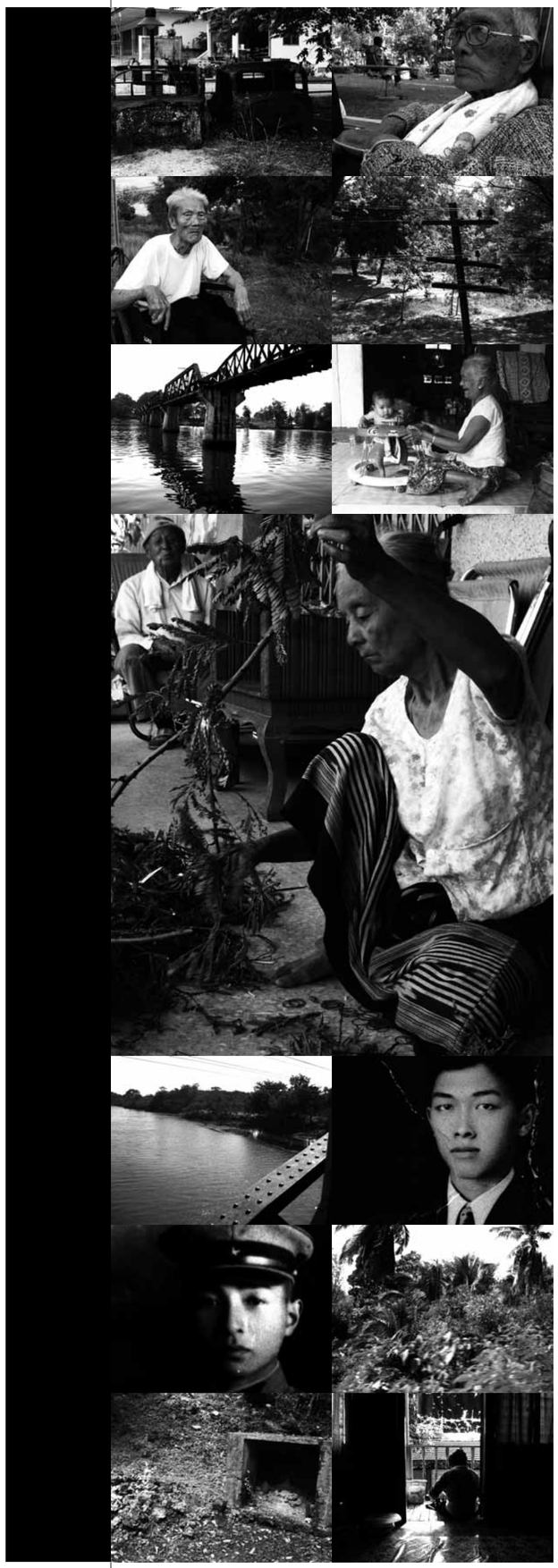
公式ホームページ
www.hanatoheitai.jp

7月、シアター·イメージフォーラムにてロードショー

川崎市アートセンター（神奈川）、第七藝術劇場（大阪）、名古屋シネマテーク（名古屋）
ほか全国順次公開

配給·宣伝に関するお問い合わせ
合同会社 東風

tel.03（5389）6605 fax.03（3369）8228
〒164-0011 東京都中野区中央3-13-10 3F
配給担当：木下　kinoshita@tongpoo-films.jp
宣伝担当：渡辺　watanabe@tongpoo-films.jp
090-4123-7191　山本、向坪



監督·撮影·編集
松林要樹（まつばやし·ようじゅ）

1979年福岡県生まれ。2004年、日本映画学校卒業。卒業制作として『拝啓人間様』を監督·編集。05年、アフガニスタン、インドネシア、アチェなどの映像取材に従事。フジテレビ「ニュースJAPAN」にてアフガニスタン選挙取材が4回特集放送される。05年より、バンコクを拠点にテレビ番組の取材と並行して、インドネシア、タイ·ミャンマー国境付近にいる未帰還兵の取材に取り組む。

編集
辻井　潔（つじい·きよし）

1979年東京都生まれ。日本映画学校2年で、重度の障がいを持つ弟を主人公にしたドキュメンタリー作品『国分寺リズムボーイ』を撮影·編集·監督。2004年、日本映画学校卒業。卒業制作として『拝啓人間様』を撮影。卒業後、『Little Birds －イラク 戦火の家族たち－』（05/綿井健陽監督）、『ガーダ パレスチナの詩』（06/古居みずえ監督）の編集助手を経て、『パレスチナ1948·NAKBA』（08/広河隆一監督）を共同編集。

プロデューサー
安岡卓治（やすおか·たかはる）

1954年東京都生まれ。77年、大学在学中より、『沖縄のハルモニー証言·従軍慰安婦－』（山谷哲夫監督）の助監督·撮影·編集を担当。原一男監督作品『ゆきゆきて、神軍』（87）に助監督として参加。『追悼のざわめき』（89/松井良彦監督）を製作。以後、『部屋　THE ROOM』（93/園子温監督）、『由美香』（97/平野勝之監督）、『流れ者図鑑』（98/同）、『白—THE WHITE』（99/同）をプロデュース。そして、地下鉄サリン事件以後のオウム信者を追った森達也監督のドキュメンタリー映画『A』（98）、『A2』（01）では、製作·撮影·編集を務める。近年は、『Little Birds －イラク 戦火の家族たち－』、『ガーダ-パレスチナの詩-』を製作。08年、『パレスチナ1948·NAKBA』を編集。